幼児の教育　第108巻　第6号　平成21年6月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

特集
子どもと水

好評連載
お茶の水女子大学
「幼・保・大」
連携保育研究の試み30

6
2009

第108巻　第6号　日本幼稚園協会

好評発売中

「環境保育」って何？

「子どもが大切にされ、自然・人・地域・社会としっかりつながって育てられてこそ、環境教育の土台ができる」それが、**環境保育**！

いつでもどこでも 環境保育

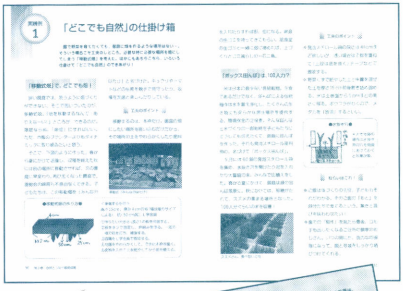
—自然・人・未来へつなぐ保育実践—

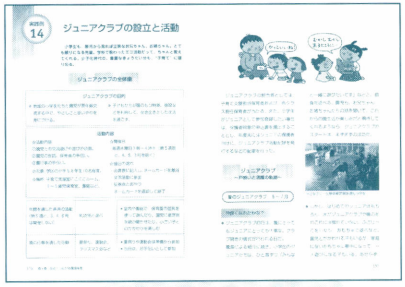
有賀克明／編著

乳幼児にかかわる仕事こそ、地球の未来を切り拓きます。自然につながり、人・地域・社会とつながる保育を通じて、環境教育のしっかりとした土台を築き上げる新しい保育思想と実践、環境保育の誕生！

21×15cm　224ページ　定価2,100円（税込）

10730





CONTENTS

はじめに
第１章　環境保育はいつでもどこでも
第２章　自然とつなぐ環境保育
第３章　人とつなぐ環境保育
第４章　社会とつながる環境保育
第５章　子どものつぶやきに学ぶ環境保育
第６章　座談会　子どもと自然と環境保育
環境保育実践と明日への希望
おわりに

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第108巻　第6号

乳幼児期の育ちと保育を考える
幼児の教育
第108巻　第6号

もくじ

巻頭言
未知なる人間の魅力……堀　智晴 4

—特集—
子どもと水
自転車世界一周と恩返しの水……坂本　達 8
夢中になれるもの—水の遊び……井上真奈 13
保育環境としての水……塩崎美穂 18
水によって生み出される子どもの体験……桃枝智子 24

出会いから再会へ……津守 真・津守房江 30

園長のまなざし第6回
小さき太陽たちへ……藤方洋子 34

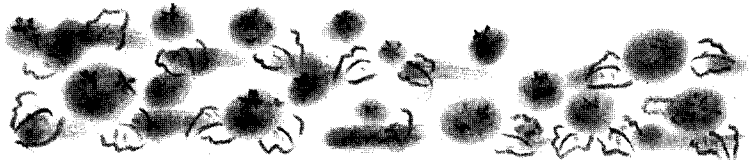
保育の中の物語(6)
よく見ると……岸井慶子 36

「幼児の教育」ネット公開に寄せて(6)
実習指導今昔……恒川直樹 40

子ども文化の詩学(3)
遊びの暗がり……森下みさ子 46

保育の現場から
A男との二年間……春野すみれ 52

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(30)
「総合的保育者」養成を支える「人」と「場」……浜口順子 58



巻頭言

未知なる人間の魅力

堀　智晴

「いてね」「はい」

「いてね、いてね、いてね、いてね、いてね。もっと幸せになるから、Hさん見ていてください」と、Mさんが筆談で書きました。

「はい、はい、はい、はい、はい。見せてください」と、筆談の介助をしていたHさんは応えました。

これは、Hさんが末期癌のためにやせ細ってきたのを見て、Mさんが「生きていてね」とくり返し書いたので、Hさんも「はい、はい」と返事されているところです。

Hさんは、息子さんが自閉症と診断されたのですが、その息子さんを育てる中で、手を添えれば息子さんが字を書く、自分の思っていることを書くことに気づき、筆談でやりとりをするようになったそうです。そしてこれまでほとんど話すことがなかっ

た、自閉症と診断されている人、知的障がいと診断されている人に、筆談介助をするようになったのです。Mさんも自閉症と診断されています。

Hさんは、残念ですが、二〇〇九年の一月に亡くなられました。Hさんをしのぶ会で、Mさんのお母さんが挨拶の中で、冒頭の筆談の内容を紹介されました。

「少しせっかちです」

Mさんのお母さんは、Mさんが初めて筆談によって書いた、二十年来胸に刻んできた心の叫びを受け止めた時、重い衝撃を受け、涙が止まらなかったと語られました。Mさんは「思いのたけを書けて安らかになった、今は幸せです」と書きました。それを読んでお母さんも安心されたそうです。

私はMさんが筆談介助を受けて、自分の思っていることをノートに書きつづるのを目の当たりに見ました。介助による筆談は、信用できないという人もいますが、私はこの目で確かめたので信頼できます。筆談は、介助者が自分の手を、書く人の手の上にそっと添え、書く人が書こうとするのを助けます。手を添えているので、書く人の動きを感じとれるのです。文字盤を指すのを介助するのと似ています。介助者が書く人にとって信頼できる人ではない場合、筆談はうまくできません。

私とMさんは、Mさんが中学生の時に出会いました。もう、二十年間のつき合いになります。Mさんが筆談をしている時に私は「堀先生をどう思いますか」と聞きまし

た。すると、返事は「すこしせっかちです」と返ってきました。「うーん、そうだなあ」と思います。私はかなりせっかちなのですが、「少しせっかちです」と表現したのは、Mさんのやさしい配慮だと思います。

見かけで判断しないで

私は、この三十年余り、保育所、幼稚園、学校の実践を拝見し、実践者と共同研究をしてきました。保育、教育の現場は、実に刺激に富んでいて、学ぶことがあふれています。しかし、不思議に思うことも多くあります。その一つは、目の前の子どもを自分の目で見ようとしない、自分なりに理解を深めようとしない保育士さんや先生方が多くいるということです。

また、障がいのある子どもの場合は、マイナス・イメージで見るのが当然と考えられていることがあり、悲しくなります。歩けない、話せない、じっとしていない、集中できない、コミュニケーションがとれない、理解できない……などなど、ないないづくしです。そのように理解をする人は、まだ、見かけだけで判断しているのでしょう。そして、そのような貧しい理解から次に出てくるのは、貧しい型にはまった指導方法（訓練）ということになっている場合が多いのです。

世界に一人しかいない目の前の子、私は〈この子〉と表現しているのですが、〈この子〉の思いや生き方を感じとり、理解をしようとすれば、保育や教育という営みは

もっと楽しくやりがいのあるものになると思います。また〈この子〉を理解しようとしている〈この私〉をふり返る必要もあります。それは自分を豊かにする契機にもなります。

未知なる存在、〈この子〉の魅力

たとえば、とも君という男の子がいるとします。そのとも君はこれまでどのようにして生きてきたのか、今、なぜそうしているのか、何を感じ、何を考えているのか、どんなことを夢見ているのか、友達や先生をどう見ているのか、世の中の出来事をどう見ているのか、これからどのような人生を生きたいと思っているのか、とも君の秘密は何か……と考えていくと、私が知っているとも君の世界は、ほんの一部であることがわかってきます。私のとも君を見る目が狭い、一面的であることにも気づかされます。とも君についてわからない部分の多いことに気づくと、未知なるとも君について、好奇心がわいてきます。そうすると、とも君が魅力的な存在として見えてくるのではないでしょうか。

子どもは未来を生きる存在です。ですから子どもはいっそう未知なる存在だと言ってもいいでしょう。謎の存在だと言ってもいいでしょう。そのほうが子ども本来の可能性も見えてきます。

（大阪市立大学　大学院生活科学研究科）

特集　子どもと水

自転車世界一周と恩返しの水

坂本　達

西アフリカの様子

小学生の時から私の夢だった世界一周。二十六歳の時、会社を辞めずに四年三か月間かけて、自転車で世界四十三か国、五万五千キロの旅に出ました。

世界一周中、最も気を使ったのが「水」。特に、開発途上国といわれる国々では、衛生面から生水は飲まない、果物は自分で皮をむく、食べ物は必ず火を通したものを食べるということを徹底しました。病気になると自転車に乗ることができませんし、まともな医療施設がない場合、取り返しのつかないことになります。水は健康に生きるために最も大切なものでした。

多くの開発途上国では、女性や子どもが遠くの川や井戸から水を運んできて生活しています。しかしせっかく運んできたその水も、川や池が水源となっている場合、そこでトイレをして体を洗い、洗濯をしますので、抵抗力や体力の弱い子どもたちが病気

にかかり、最悪の場合死亡してしまいます。

私は毎年のように、西アフリカのギニア共和国に井戸掘りや診療所建設のために遠征していますが、この国の平均寿命が四十六歳と言われるのには、病気が原因で子どもたちの死亡率が高いという背景があります。家に常備薬があり、薬局や病院があり、電話があり、いざというときには救急車もある日本とは違い、薬も無く、衛生的な飲み水さえ入手できない国なのです。

一度、西アフリカで男の子が道端で、ウンチをしているのを目撃したのですが、ウンチをしている男の子のお尻から、お兄ちゃんが白くて長い寄生虫を引っ張り出していました。これも汚染された水や食べ物が原因です。私もアフリカで寄生虫を宿していたことがありますが、体調も悪くなりつらいものです。病気や衛生に関する教育も大切ですが、それが実現できない環境があることも事実でした。

ギニアで発病

世界一周中、西アフリカのギニア共和国で、連日の暑さとハードな走行で私には疲れがたまっていました。明日は休息日にしよう、そう思いながら眠りについた翌日でした。

昼頃から体調が悪くなり、ひどい下痢が始まったのです。食欲がなく、悪寒がしていたので普通の下痢ではない気がしていました。そしてわずか一時間で、熱が一気に39・5度に。マラリアを発病させてしまったのです。翌朝、自分の便を確かめると、なんと、下痢に鮮血が混ざっていました。頭のてっぺんまで鳥肌が駆け上りました。赤痢も併発……。きちんと治療しないと命を落とす、水が原因の病気です。自分が二つの大病にかかった運命をのろっていました。

しかしその村にはドクターがいて、彼が「すぐに

治療しなければ助からない」と言って、村の最後の注射を私のために使ってくれたのでした。村の子どもを救うための大切な薬を、よそから来た私に使ってしまったのです。理解を越えた出来事でした。お陰で私は一命を取り留めたのです。

世界一周を終え、私はギニアのその村を七年ぶりに訪れました。命を救ってくれたドクター、食事を作り、血便の付いたパンツを洗ってくれるなど、献身的な看病をしてくれた村人たちにお礼を伝えに。そして薬をお返ししに。首都でマラリアの薬、寄生虫下し、抗生物質などを千錠単位で入手しました。

村人たちは歓迎してくれ薬も喜んでくれました。しかし、最後に言われてしまったのです。「私たちにはもっと必要なものがあるのです。それはきれいで安全な水です。きれいな水があれば、子どもたちの病気も減るのです」。日本で当たり前に手に入るものがここには存在しないこと、そして、いつも自分だけ浄水器を使って安全な水を飲んでいたことを、後ろめたく思いました。

歓迎ムードが落ち着いたころ、日本から持ってきた七年前の写真を村人たちに渡しました。しかし、期待していたうれしそうな反応がありません。私は当時の写真を指さしながら「この人はどこ?」「この人は?」と七年ぶりの成長や変化を楽しんでいたのですが、一人の男の写真を指さしたところ、反応がありませんでした。どうしたのだろう、と思っているとドクターが「彼は亡くなった」と言いました。私はまたしても日本の感覚でいたことにハッとしました。ドクターは続けて子どもを指さし、「この子も亡くなった」。さらに別の写真で、「君にご飯を作ったこの女性も亡くなったよ」と続けたのです。村人たちはひどく落ち込んだ様子でした。写真

を見ながら泣き崩れる女性もいました。命の恩人たちにお礼を伝えに行ったら、その人たちはもういなかったというのはショックなことでした。

「きれいな水を手に入れたい」その思いを支援したい

世界一周から帰国後、世界中の経験やメッセージをフォトエッセイ『やった。』（三起商行　二〇〇一年）として出版しました（現在十四刷）。そしてその印税で、ギニアの人たちに恩返しをしようと決めました。ドクターと二年がかりで準備を進め、村にきれいな水を得る手段としての井戸を完成させました。村人たちが企画し、業者や資材を手配し、率先して労働力を提供して実現したのです。完成した時は、「子どもの感染症が減る」「村の歴史的な出来事だ」「日本ありがとう！」と、みんなが喜びました。特に、女性がうれしそうでした。

井戸掘りプロジェクトのとき、目に焼き付いているのは、子どもたちが建設にかかわっていた様子です。大きな子が小さな子たちをどこかへ連れて行ったと思っていると、しばらくして大勢の子たちが頭の上に砂利や石をいっぱいに入れたバケツを運んで戻ってきたのです。六歳ぐらいの子が「自分たちの井戸だ！」と言っていたのには感動しました。また、資材を運ぶトラックを村に通すため、子どもたちが木を切ったり石を掘り起こしたりして道を作っていました。一人ひとりがかかわることできれいな

▲命の恩返しの井戸が完成

水が手に入る、世の中が変わる、という感動を一緒に味わったのです。

現在も、その井戸は村人たちが毎月お金を出し合って修理代や部品代として使えるようにし、水管理委員会がしっかり維持管理を行っています。

井戸掘りの次に

現在、ドクターが住むギニア北西部のある地区には約七千人が住んでいますが、病院も診療所も一つもありません。そこで、ドクターは自宅にビニールシートを張って仮設の診療所として治療を行っています。「まともな医療施設や薬があれば、もっと多くの子どもたちを救うことができる」と、ドクターや地域の人が立ち上がりました。井戸作りと同様です。応援したい、そう思わされます。今年中に診療所が完成し、次は医者になりたいという学生の奨学金制度の設立を予定しています。

日本の子どもたちへ

現在、日本全国の学校を講演活動で回っていますが、ある小学校で「きれいな水がなかったらどうするか」という話題になったとき、子どもが「自動販売機で買う」「ジュースを飲む」と答えたことがありました。都会では井戸を知らない子もいます。

一方で、子どもたちは日本のように生活できることが当たり前ではない、ということを理解します。そして、その世界に対して「自分たちにできることはないか」と自主的に話し合うのです。日本の子どもたちには共感し、行動する力があります。水を通じて世界とつながります。

これからも私は一連の活動を通じて、水や命の大切さや、人と人とのかかわりで、さまざまな夢が実現するというメッセージを伝え続けたいと思っています。

（㈱ミキハウス勤務　早稲田大学客員教員）

特集　子どもと水

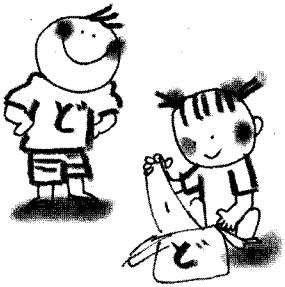
夢中になれるもの―水の遊び

井上真奈

「はだしになってもいい？」

「どうぞ。」

四月から十一月ごろまでの雨が降っていない日には、一日に何度も、子どもと保育者の間でこのやりとりが行われます。脱いだ靴下を上履きの中に入れて、子どもたちは意気揚々と園庭へ駆け出し、思い思いの遊びを楽しんでいます。はだしになった子どもたちは、必ずと言っていいほど、水を使った遊びをしています。地面に座り込んで、気持ちよさそうに泥を手でかき混ぜている三歳児。花や葉や実をすり鉢でつぶしては、「ジュース」「お茶」「カルピス」と何色もの色水を作る四歳児。砂場いっぱいに大きな山や川、橋や線路を作る五歳児。彼らにとって、水は遊びに欠かすことのできない要素です。夢中になって遊んでいる子どもたちの姿を見ていると、時どきふと、私に保育の道を志すきっかけを与えてくれた、地球の裏側に暮らす子どもたちのことを思い出します。



中米コスタリカの子どもたち

大学時代、スペイン語を専攻していた私は、語学習得のため中米コスタリカに滞在していました。スペイン語で「豊かな海岸」を意味するコスタリカは中米のちょうど真ん中辺りにあり、九州と四国を合わせたほどの面積に、四百万人ほどの人々が暮らしています。一年は、一日に一度はスコールが降る雨期（五月から十一月）と、乾期（十二月から四月）の二つの季節に分かれています。年間を通して平均気温二十度程度の常春の気候が特徴で、八百五十種類の鳥類と約千種類の蝶が生息、また世界に生息する八種のうち、六種類のウミガメが産卵にやってくるという自然豊かな国です。

○歳の男の子がいる家庭にホームステイした私は、生まれて初めて、子どもとかかわる生活を体験しました。また、近所に住む幼い子どもたちから容赦なく浴びせかけられる「なんで？」の嵐が、私の語学力を鍛えてくれました。

コスタリカの人々の中には「子どもは宝である」という考えが浸透していて、街の中でも男性・女性を問わず、子どもを見かければほほ笑み掛けたり、話し掛けたりする姿があちらこちらで見られます。たまたま同じバスに乗り合わせた年配の女性が、泣いている赤ちゃんを抱いた若い母親に「なんてかわいいんでしょう」と話し掛けたのをきっかけに、何人もの女性が「うちの子のときはこうだった」、「この時期にはこんなものを食べさせるといい」と子育て談議が始まり、気がつけばバスを乗り越してしまう人が出る程の盛り上がりに……。日本では、ぐずるわが子を抱き、身を縮めるように電車やバスに乗っている母親をよく見ていたので、人々の子どもへの関心の深さに驚かされました。

仕事をもつ母親のために子どもを預かったり、育

児の相談に乗ったり、代わりに買い物に行ったりという、近所同士の助け合いも、頻繁に行われています。大げさな子育て支援というのではなく、身近な子どもの成長に関心をもち、それぞれができる範囲でかかわっているという人々の関係は、とても温かく、自然なものに感じられました。私も初めは赤ちゃんの抱き方すらわからなかったのに、気づけば勉強の傍らあやし、おしめを替え、ミルクをやる生活が日常となり、週に何日か、家で数時間預かっている近所の子どもたちと遊ぶことを、楽しむようになっていました。外国語の中に絶えず身を置いている緊張感を、子どもたちと過ごす時間が和らげてくれていたのかもしれません。こうして私は、コスタリカ流子育ての輪の一部に入り込んでいきました。

近所を散歩しながら色とりどりの花を摘んできて色水を作り、それで紙に絵を描いたり、つめに塗ってマニキュア屋さんごっこをしたり、ジューススタンドごっこをしたり、庭の土を掘って山を作り、トンネルを通して水を流す工事現場ごっこをしたり、泥でパンやケーキを作ったり、同じ遊びに飽きることなく何日も、試行錯誤を繰り返したものです。子どもたちは水を使った遊びが大好きでした。スコールの後のぬかるみにしゃがみ込み、頭のてっぺんから足の先までチョコレート色にして遊んでいる彼らの姿は、まるで絵本『おなかのすくさんぽ』（片山健作・絵 福音館書店 一九八一年）の主人公のよう。しっかり遊んでお腹がすくころには、ちょうど母親が迎えにきて、それぞれの家へと帰って行きます。

今現在、私がかかわっている子どもたちも、雨がやんだ後の園庭にしゃがみ込んでは、ぬかるみに手を浸して感触をじっくりと味わったり、泥だんごをいくつも作ったりしています。彼らの姿を見ながらコスタリカで過ごした日々を思い返してみると、子どもの好奇心や探究心を満たしてくれる遊びの素材

は、時代や場所にかかわらず変わらないものなのだなと感じます。

どろんことAくん

私が勤めている園では、子どもたちも保護者も、汚れを気にせず、水遊び・泥遊びを楽しめるよう、それぞれに「ど」と書かれたTシャツとパンツとズボンと、体を拭くためのタオルを、ビニール袋に入れた「どろんこセット」を一つ作ってもらっています。五月後半から夏休み前までは、特にこの「どろんこセット」が大活躍し、子どもたちはたっぷりと水や泥の感触を味わいます。ほとんどの子どもがすんなりと遊びに入っていく中、Aくんはなかなかその感触を楽しめずにいました。

三年保育で入園したAくんは、クラスで最後に誕生日を迎える男の子で、入園当初は、同じクラスの子どもたちが「先生、赤ちゃんがいるよ」と言うほど、身体も小さな子どもでした。Aくんは入園するまでに、水や砂や泥で遊んだ経験が少なく、外をはだしで歩いた経験もなかったので、初めてはだしで園庭に出たときには、体が固まってしまったかのように目を見開いて、ただ立っていました。その後も保育者に手をひかれてどろんこの中を歩いては大泣き、手のひらに泥を乗せられては大泣きの繰り返しでした。夏のプール遊びも、彼にとっては初めての経験で、水の中に入ったとたん、火がついたように泣きだし、こちらも結局楽しむところまでは程遠い状態のまま日程を終了。年少の間は、水遊びも泥遊びも楽しむことはありませんでした。

Aくんも年中クラスに進級し、またどろんこの季節がやってきました。クラスの子どもたちが自由遊びの時間に「はだしになってもいい?」と聞いてくる中、「ぼくは靴を履いているの」と言いに来る彼をどう泥遊びへ誘おうか、担任の私はどのようにか

かわっていけばいいだろうかと思いを巡らせていました。そんなときに力を貸してくれたのが、『こぐまちゃんのどろあそび』（わかやまけん絵 森比左志文　わだよしおみ文 こぐま社 一九七九年）、『こぐまちゃんのみずあそび』（同 一九八〇年）、『どろんこどろんこ！』（わたなべしげお文 おおともやすお絵 福音館書店 一九八九年）などの絵本でした。どれも、もっと幼い子どもが楽しむ絵本ですが、その年ごろに水や泥に出合わなかったAくんには、ちょうど良かったようです。自由遊びの時間にAくんを含めた何人かと一緒に絵本をめくりながら「もうちょっと暖かくなったら、どろんこセットを着て遊ぼうね」と話すと、わくわくした様子で早くやりたいと口々に言う子どもたちに混ざって、Aくんからも「ぼくもやる」の声が。経験したことを整理して自分のものとするための時間が、Aくんには長めに必要だったようです。

クラス全員で「どろんこセット」に着替えて遊ぶ最初の日には、昨年度の姿がうそのようにすんなりとはだしで園庭へ出て行きました。初めのうちは、泥を手渡されてもどうしたらいいのかわからない表情をしていましたが、日を追うごとにその感触になじみ、一か月が経つころには自分から泥を手に取って、おだんごやハンバーグ作りを楽しむように。また、葉や花で色水を作ることにも興味をもち、時間をかけて大切そうに作っては、毎日のように家族にプレゼントするようになりました。その後のプールにも泣かずに入り、顔をつけることや、ワニ泳ぎに挑戦するAくんの成長ぶりには、本当に驚かされました。

今年度も、水遊び・泥遊びの季節がやってきました。今年は子どもたちのどんな経験に立ち会えるのか楽しみです。

（東京都　南部坂幼稚園）

特集　子どもと水

保育環境としての水

塩崎美穂

水の魅力ー保育で大切にされてきた素材ー

二〇〇七年の夏、イギリスのペングリーン（ロンドンから北に車で二時間ほどの町）にある保育施設を訪問しました。[1] このペングリーンセンターは、世界中の保育実践者や研究者が訪れる「総合的保育施設」兼「保育者養成・研修機関」であり、今や、福祉や教育に関する国境を越えた共同研究の拠点でもあります。

ペングリーンセンターのナーサリーは、ビーチと呼ばれる広い砂場、緑におおわれた園庭、いつでもくつろげるソファー、泥んこの長靴、洗いたての洗濯物、いつでも使える絵筆や工具、彩り鮮やかなおいしいランチなど、生活臭さのある居場所や物でいっぱいです。そこは、世界中の保育関係者に研究交流の場を提供しながらも、何をおいてもまず目の前の子どもたちの生活世界を支える保育の場として機能しています。

特に印象的だったのは、広い園庭の一角に設置された、流し台をつなげたような水遊び用の大型遊具です（写真参照）。長いステンレスの水路を大量の水がジャージャーと勢いよく流れ、子どもたちがその流れに手を浸しながら、水路に沿って歩いたり、流れに逆らって立ち止ったりして水を確かめています。水の中を車や電車を走らせている子どももいます。屋内にあるシャワー室の入口には、声をあげながら水浴びをする子どもたちの写真もありました。少し見回せば、ペングリーンセンターの保育の中に、水が重要な素材として位置付けられていることがわかります。

でも、なぜ水なのでしょう。水は、子どもが自ら触り、冷たい、温かい、ぬるっとしている、さらっとしている、重い、軽いなどの感触や存在を確かめることができる物体です。しかも、そのまとまりや流れを、手や物を使って、簡単に変えることのできる可塑性の高い素材です。砂や絵の具などに混ぜれば、元々の素材（砂や絵の具の硬さ）が変容したりもします。子どもが「自分の力でコントロールできる」という感覚（全能感）を感じられる教材として、水は、いつの時代にも私たちを支えてきてくれたのではないでしょうか。

また水は、同じように可塑性の高い砂よりも、さらに流動的で形がとらえ難く、蒸発して、色や匂いがわからなくなってしまう場合もあります。水は人

間に、個体としての境目よりも全体との一体感を感じさせやすい素材かもしれません。目も見えず耳も聞こえないヘレンケラーが、流れる水を受けて初めて物に言葉があることを理解したシーンに現れるような、水という素材の奥行きについて、今一度、考えてみたいと思います。

水の効能 ―わが家のひとコマ―

ここで少し、何の変哲もないわが家の出来事について紹介させていただき、水について考える一助にしたいと思います。

先日、小学二年生の次男が父親との将棋に負け、悔しさに突っ伏して泣き崩れ、いっこうに立ち直る兆しが見えないことがありました。私は抱き上げてなだめ、何があったのかを聴き、次の場面へと気持ちをもっていく手助けをしたくなりました。母親の強引さを含んでいるとは思いつつ、子どもが袋小路に迷い込んだこうしたときには、つい、抱っこしたくなります。もちろん抱き上げた後には、これで良かったのかと私なりに自責の念にかられるわけですが、泣き止んだ子ども本人は、案外ケロっとしていたりします。

ただ、この日の彼は声をかけても、がんとして動かず、さすろうとすると身をよじり、ますます大声で抵抗しました。でもそのうちに私には、こうして悔し泣きするほど大きくなった息子をうれしく思う気持ちや、みんなに自分の悔しさをワアワア言って伝えようとする幼さのある息子へのいとおしい気持ちがムクムクとわいてきて、泣いている息子にまじめに対応しようとすればするほど、なんだかおかしくて笑いがこみ上げてきてしまい、どうにもならなくなってしまいました。あのとき、そのまま放っておき、私が何もしなくとも、きっと彼は自分で区切りをつけて泣き止んだでしょう。でも、私はおかし

さに堪えながら、ひと声かけ、彼の背中を押しました。「お風呂にでも入ってきたら?」と。

すると、それまで岩のごとく動かなかった彼が、兄が先に入っているお風呂に（精いっぱい怒った足踏みを見せることは忘れませんでしたが）向かっていきました。困ったときのお風呂頼み。功を奏したようです。このとき私は、どこかで、お風呂にたどり着けば事態は収束する、お風呂ならば彼も向かうだろう、と思っていたように思います。赤ちゃんを抱っこすれば泣き止むことがわかっている程度に、お風呂に行けば彼の気分が変わることを、息子も私も予測していたように思うのです。

果たして彼は、温かい湯気の中に入り、湯船につかり、兄と何やら話し始めました。声が聞こえてきます。「……父ちゃんはさ、もう大人なんだよ。だからさ、二年生が負けてもおかしくないよ。またやればいいじゃん」という兄の声に、「……でもさ、……ぼくさ、勝てると思ったんだよ……。負けちゃったよ」としゃくりあげながら弟が応えています。お風呂から出てきたときは、まだ憂いを帯びながらも、次男の機嫌は八割方回復していました。

さて以上が、お伝えしたかった出来事です。特に珍しいことでもなく、どこの家庭でも多かれ少なかれ、このように、お風呂の効能（水の効能）が感じられることがあるのではないでしょうか。生活の流れや気分を変える水の威力は、どこか当然のこととして私たちに受け入れられ、誰もが身近な出来事として感じているように思います。

サムシング・グレイトという存在

こうした水の威力について思うとき、私は、作家小川洋子さんの「サムシング・グレイト」という話を思い出します。それはこんな話です。

数学者や科学者は、目に見えない何か偉大なもの

（サムシング・グレイト）に対する謙虚さをもって世界のありさまを追求しており、その思考は次のようになっているというのです。

「三角形の内角の和は一八〇度である。それは人間がそういうふうに仕向けたからでもないし、人間の心が感じるからでもない。人間が生まれる前から、ずうっと世界はそういうふうに作られているんだ。ということは、人間よりももっと偉大な何者か、サムシング・グレイトによって、三角形の内角の和はどんなに小さな三角形も巨大な三角形も、すべて一八〇度になった。だから数学者は、偉大な何者かが世界のあちらこちらに隠したそういう秘密を、洞窟から宝石を掘り返すようにして見つけ出す、それが仕事だ。[2]」

つまり、サムシング・グレイトは私たちの世界にすでに常に存在しており、それを探すのが数学者や科学者の役割であるということなのです。科学者は何か特別な才能があるから研究をしているのではなく、誰もが日々日常生活の中で享受しているものを認識し、浮かび上がらせる作業をしているにすぎない。相対性理論はアインシュタインが発見しなくても、誰かが何年後かに発見したし、フェルマーの定理もDNAの配列も、いずれ誰かが証明した、知の解明の一部として、科学者個人は匿名的に研究を遂行しているというわけです。サムシング・グレイトの前にひざまずくような心でいる研究者の姿を、大変魅力的なものとして小川さんは紹介しています。翻（ひるがえ）って、モーツァルトの音楽は彼が居なければ生まれず、あるいは、ピカソの絵はピカソにしか描けなかったと言われるように、芸術家と言われる人の活動には、サムシング・グレイトへの探求とは異なる何かがあるのかもしれません。

水という素材について考えるとき、保育や子育てがその双方にまたがっているように、このサムシング・グレイトに属するような日常的感覚を支える部分と、芸術的活動を促す部分の双方があるように私は思っています。

子育てのような日常の実践の中にも、このサムシング・グレイトのようなものが隠されており、たとえば、お風呂の水のような他愛無い物にも何かがある、という風には考えられないでしょうか。選ばれし者が特別に行うのではなく、連綿と続く命のつながりの中で、誰もが味わう予兆のような感覚です。お風呂に入れば機嫌が直るとか、そういうささやかなことが日常生活の文脈の中に隠れており、それが保育の中にあるサムシング・グレイト、おもしろさなのかもしれません。なぜ、私は息子の悔し涙を見てどうしようもなくおかしくなってしまったのか。これもまた、人間の不思議、隠された謎のようにも思えます。私が解き明かさずとも、誰かがたどりつく真理があるのかもしれません。

ペングリーンセンターの豊富な水の流れには、人間がその誕生から身にまとってきた水という素材への信頼を感じます。〇～二歳の赤ちゃんの保育室内に、砂場と水場が常時設定されている様子に彼らの水に対する強い思いを感じました。衛生面の心配よりも、水を通して表現される芸術的イメージと、それよりも何よりも、わが家のお風呂場にさえあるような水の大いなる力が子どもを支えるということへの信頼が、謙虚にもたれているのだと思いました。

（お茶の水女子大学　幼保プロジェクト　専任講師）

1. 訪問の詳しい内容については、拙稿「イギリス視察訪問（1）」『幼児の教育』第一〇七巻第六号二〇〇八年六月「イギリス視察訪問（2）」『幼児の教育』第一〇七巻第七号二〇〇八年七月、参照。
2. 小川洋子著『物語の役割』ちくまプリマー新書二〇〇七年、十六頁

特集　子どもと水

水によって生み出される子どもの体験

桃枝智子

保育者として九年間保育実践に携わっていた私は現在、保育を学ぶ学生として、東京都内にある幼稚園で観察をさせていただいています。観察者という立場で子どもと保育者の生活の場に入る経験は、保育者だった当時の私と向き合い、保育実践を見つめるきっかけにもなっています。

今回は、これまでの観察記録をもとに、子どもが「水」とのかかわりの中でどのような体験をしているのか、三つの事例より考えてみたいと思います。

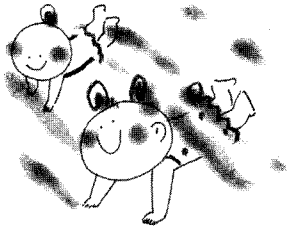
事例1「アイちゃんと一緒だね」
（年少児・六月下旬）

年少児クラス合同のプール遊びが始まる。子どもたちはプールの中に入ると、早速「キャー」と水を掛け合ったり、出会った友達にタッチしたりする。

アカネ（仮名以下同様）は「およごうよ～」

とアイに呼びかけると、水底に両手をつきワニ歩きを始める。アイも「およごっか～」と答えると、アカネの横に並んでワニ歩きを始める。アカネはワニ歩きをしながら「アイちゃんと一緒だね！」とアイに呼びかける。（中略）

プール遊びが終了する。アイとアカネはプールから上がり、着替え終えると「気持ちよかったね～」「楽しかったね～」と手をつなぎ、集合場所へと向かう。



アカネとアイが水と戯れる姿を観察しながら、私は「活き活き」という言葉は、まさにこのような様子を言い表すためにあるのだと思いました。なぜなら、彼女たちが水と混然一体となって躍動しているように見えたからです。

他者との間をつなぐ水

幼稚園に入園当初、見知らぬ他者であったアカネとアイは、六月半ばを過ぎたこの時期より、互いにつながりを求め、一緒にいる姿が多く観察されるようになりました。洋服の色や持ち物など、少しでも二人の間に同じことがあると、「キャー」と叫び、抱きしめ合うセレモニーが頻繁に行なわれていたのもこのころでした。

そのような彼女たちにとって、プールの「水」は二人のつながり感を確かめることができる媒介物であったようです。ワニ歩きをすることによって生ま

れる波、その波のリズムを共に体感すること。このことは、地上では味わうことのできない水中ならではの身体感覚です。また、水の冷たさを体感することでわき上がってくる情動を共にすること。このことは、二人のつながり感をより促進させる働きをもっていたと考えます。

事例中の「アイちゃんと一緒だね！」というアカネの言葉は、二人で同じワニ歩きをしているという行為に対してだけの言葉ではなく、水の性質がもたらしたつながり感を表す言葉だったのでしょう。

事例2 水飲み場での出来事
（年少児・七月当初）

セイタとタロウは、保育室前の水飲み場の前に立つと、水道の蛇口を次々にひねる。三つの蛇口から勢いよく水が流れ、シンク内に三つの水の動きができる。二人はその様子をしばらく眺めると、今度はシンクの中に両手を入れ、ワイパーのように左右に動かす。しだいにシンクに水がたまり、排水溝の辺りがブクブクしてくる。セイタは手を離すと、排水溝に渦を巻いて吸い込まれていく水の様子をじっと見つめる。

今思うと、せっかちな元保育者の私は、彼らの行為を観察するというよりも、ハラハラとその行方を見守っていました。彼らのことを、何をするわけでもなく、保育室をさまようことの多い子どものように見ていたことから、彼らの行為を「水を無駄遣いしている」「遊んでいない」ととらえていたのかもしれません。

しかし、観察者として彼らをじっと観ているうちに、彼らは無意味な行為をしているとはいえないと思い始めてきたのです。

生命を感じる水

矢野智司※は、自己と世界との境界が溶解してしまうような「溶解体験」が生じる時、子どもは生命に触れる深い体験をしていると論じています。このような生命の体験として、再び彼らの行為をとらえ直してみると、次のようなことが推測できると思います。それは、彼らが水と一体となり、生命の発生までさかのぼるような深い体験をしているのではないか、水に溶け込み、再びわれに戻るような自己を感じる体験をしているのではないかということです。

ひとたび内的な世界に私の視点を移してみると、これまで、静的な存在として私の目に映っていたセイタとタロウは、流れゆく水のように、新しい自分へと変容しようとする動的な存在となって、私の前に立ち現れてきたのです。私は、大人の側からの目的や学びがあるかないかだけの視点で、子どもの行為をとらえていたことに気づきました。表面的な網の目で子どもをとらえると、セイタとタロウは、意味のない行為をしている、遊べない子どもとして判断されてしまうでしょう。子どもの行為の意味は、大人の価値観の中ではなく、子ども自身の中にあるのだと感じさせられた出来事でした。

事例3 色水作り（年中児・九月当初）

サオリ、コトミ、リエ、アカネの四人は、それぞれ水が入った透明のボウルを手前に置き、テーブルを囲んでいる。四人は、青色や緑色のカラーリボンを2㎝くらいに裁断すると、ボウルの中にリボンを入れ、大きいスプーンでかくはんして色水を作る。この工程を黙々と繰り返している。リボンから色が溶け出してくると、ボウルに入った水はしだいに濃い色水へと変化

していく。

サオリはボウルの中から青のリボンを取り出すと、今度はリボンをザルの中に入れる。そしてボウルの上にザルを置き、大きなスプーンでリボンを押さえつけ、さらに濃い色水を作る。色水は赤色の色水と混じり紫色へと変化する。

サオリは小さいペットボトルに紫の色水を入れると、目線をペットボトルまで下ろし、しばらく眺める。

彼女たちの色水作りに出合ったとき、私は色水作りの材料にリボンを使うのは、少しもったいないような気がしました。しかし、これまでの姿を思い返してみると、彼女たちは、園庭に咲くオシロイバナなどの草花や絵の具を使った色水作りを、年少のころより何度も経験していたのでした。リボンを使った色水作りは、これまでの歴史があっての発見だったのでしょう。私は、保育に対する偏った思い込みがあったことに気がつき、心より反省しました。

文化を生み出す水

彼女たちは、会話することもなく、黙々と、色水作りの工程を重ねていきます。リボンを水に浸す。かくはんする。ザルにリボンを入れ、押さえつけ、色水を濃くする。そして、できあがった色水をじっと見つめる。水に向き合い、色水を作り出していく彼女たちの間には、ゆったりとした贅沢な時間が流れています。その様子を見ていた私には、彼女たちが四歳の子どもではなく、熟練したこだわりの染職人のように思えてきました。

人はいつから色に惹かれ、色を生み出すようになったのでしょうか。人間が水との暮らしの中で生み出してきた文化の根源が、彼女たちの色水作りの姿から、垣間見えるように感じた出来事でした。

終わりに

子どもは「水」とのかかわりの中でどのような体験をしているのか、三つの事例をもとに子どもたちの内実をとらえてきました。その結果、子どもたちは大人が考える以上に根源的な体験をしていることがわかりました。子どもが「水」によって他者とのつながりを感じていたこと、「水」と一体になるような体験をすることで自己を体験していたこと、「水」と向き合う中で人間が生み出した文化を根源的に体験していたこと、などです。

「水の性質の不思議さを感じてほしい」、「夏ならではの水遊びを経験してほしい」、「水が大切な資源であることを伝えたい」など、保育者は子どもたちにさまざまな願いをもち実践することがあるでしょう。しかしこのことは、子どもの自身の意味ある体験を見逃してしまう、一瞬にして消滅させてしまう危険性をもはらんでいるということではないでしょうか。

子どもの深い体験。それは「子どもの行為の意味を大事にすること」「子どもに対する願いをもつこと」、この二つの間を行き来する中で、即興的に状況的に子どもに応じていく保育者の姿勢によって導かれるのだということを改めて考えさせられました。

「子ども」と「水」。この二つの間には、まだまだ深いメッセージが隠されているのではないかと思い始めています。今後、この関係について考察を進めるためには、私自身の深い体験と洞察が、重要な鍵となってくるのかもしれません。

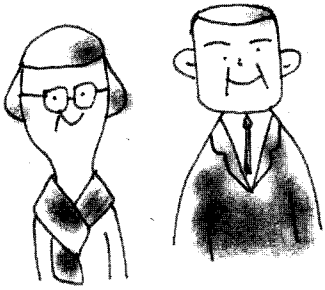
（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
博士後期課程）

※参考文献

矢野智司『意味が躍動する生とは何か
遊ぶ子どもの人間学』世織書房　二〇〇六年

出会いから再会へ

津守　真（M）
津守房江（F）



二〇〇七年の秋から冬にかけて、私たちはそれぞれ体調を崩しておりましたが、今年の一月、二人の体調が回復し、毎年卒業生を招いて行われる愛育養護学校の同窓会に、久々に出席できたのはうれしいことでした。

M　そのとき私が考えていたことは、一人の力ではできないことも、みんなで力を合わせることによって、予想以上に立派に成し遂げられることがしばしばあるということでした。

この日私どもが到着する前に、いろいろなグループが自由に座れるように、各クラスから運んできた机が三つ四つずつ並べられていました。

F　私は会場に足を踏み入れるや、出会う卒業生の家族の一人ひとりが思いがけないほど成長して、そ

れぞれが立派な家庭をつくっていることに驚き、感じ入りました。

M　私どもは退院（二〇〇八年一月）してすぐに、『出会いの保育学―この子と出会ったときから―』※という本を出版しました。これは、『幼児の教育』に対談として連載してきたものを、入院する前に出版社に渡しておいたものです。

その「あとがき」を書いたとき、私は病気になってから、退院するまでの間に、自分の身に起こったことを考えました。

この子たちとは、まさに久々の再会です。私自身についても、一人ひとりのことでも、そこにはいろいろなドラマがあったことを想い、味わっていました。出会いということから言えば、病気や障碍（しょうがい）は出会いたくない出会いですが、このことによって、ここの子どもたちのことがもっと自分に近くになりました。

F　私が座ったのは、S君の一家四人のテーブルです。真ん中に置かれたお菓子を、青年になったS君が同じテーブルの人に分けていました。それがS君の周囲の人に対する気遣いだということにすぐに気が付きましたので、私も一緒にお菓子をつまみました。このS君を中心に、お姉さんと父親と母親は穏やかな落ち着きをもって見ているので、テーブルの周囲にいい雰囲気が漂っていました。

お姉さんがこの家族の要になっていて、公立養護学校の先生になっていることを話されました。以前弟のS君の障碍のことから、養護学校の先生を目指していると聞いていたので、それが実現したことを思い、晴れ晴れとした未来がS君がいる家庭の中で開かれてきたのだと思いました。「何と良い家族になったこと」と、温かな感動が広がりました。

M　それぞれに、この子たちを中心にして、家族が落ち着いて今を生きているのですね。父親が支え、母親が成熟して生活し、きょうだいが今、社会に巣立つところまで来ているのですね。

F　後半、私は別の部屋で車座になって、母親たちに話をしました。『出会いの保育学』という本の中の「出会い」ということは、自分の枠から出て会うことと話しました。私たちは愛育の保育の場で、一人ひとりの子どもと出会い、私たちが育ててもらったことを思いました。

　重度の障碍を負ったM君は、今日はお父さんが家で見ていてくれるとのことで、若かったお父さんが今そうやっておかあさんを支えて、陰の力になっていることがわかりました。美少女のようだったお母さんが、ふっくらと穏やかになっていて「わたしはあんまり良い人にならないことにしました」と耳元でささやいてくれました。実家の応援も少ない中で「よくぞこんなに、良い家庭をつくって……」という思いがここでも心に満ちてきました。

　私の顔を見るとどういうわけか涙が出てという、忘れられない一人の母親と再会した時には、愛育擁護学校に通い始めたころに、彼女の母親が遠くから訪ねて来て、この母親のことを「この子は、本当に良くできた娘で、こんな大変な中で、よく頑張って子どもたちを育てている」と、涙ながらに娘の家庭を心配して話されたことが思い出されました。

M　気が付くと、私の傍らにY君が身を寄せていました。幼いころ、彼は公園の中を走るのが好きでした。私が心配してもきっとそばに戻って、私の目を真っすぐに見ました。今日もふと気が付くとこの子がそばにいるのです。何か話したいのだけれども、言葉が出てこないという様子でした。「私どもは、

最近、キリスト教の洗礼を受けたのです」と、Y君の母親が言葉を添えました。上に目を向けて生きようとしている家族の姿に、私はこの家族の健全さを思いました。

F　現代の家族の問題は、しっかりした人間の基盤として取り上げられることは、少ないように思います。少子化対策として考えられたり、家庭をつくらないことが新しく、晩年の生活をシンプルにするべきだと言われたりもします。

しかし、今日私が出会った家族は、障碍をもつ子を中心にして、きょうだいもさまざまなドラマにぶつかりながら上向きに生きておられます。

古くさいかもしれませんが、夜遅くまで相談に乗りきょうだいの問題まで親身に相談を受けて、最も小さい共同体である家族を、それぞれの時期の職員がみんなで支えてきたことを思いました。

M　それが日常の保育につながっているのですね。ここの保育の場が長く続いてきたことの根底に、こうした家族と職員の関係があります。乳幼児は人間の基礎の時期で、まずそこをしっかり培ってきたことの果実を今日は見せてもらいました。

（時間も過ぎ、S君が不機嫌になると、その妹がすっと立って、その子の好きな曲をピアノで弾きました。S君は心が静まり、みんな一緒に連れ立って帰りました）。

出会いの後の再会も、新しい喜びをもたらし、この日は本当にうれしい日でした。

（保育研究者）

※津守真・津守房江著『出会いの保育学
この子と出会ったときから』ななみ書房二〇〇八年

園長のまなざし

第６回

小さき太陽たちへ

藤方洋子

ひと雨ごとに緑萌える季節、この季節の緑は春先の成長に後押しされるかのように、みずみずしさを増し輝き放っているように見えます。それは、入園期の不安や心細さを見事に乗り切った年少組の姿とも、またより自信を深め、たくましさを増した年長組の姿とも重なり、私の心を温かくします。その緑輝く六月、この時期こそ、入園以来慌しかった日々を振り返り、子どもたちの成長を見つめ直す好機のように思います。

「園長先生、見て……」。四月いっぱい、顔をくしゃくしゃにしながら泣き叫んでいたA君の笑顔を、小さな傘の中に見つけたのは、つい先日のことです。手のひらには、ちょこんと小さなカタツムリ……。

A君の自信に満ちあふれた声に、宝物を見つけた喜びと共に、小さな命に向けられる限りないやさしさを感じとり、今、確かに幼稚園の生活を楽しみ、生きていると感動を覚えたものです。

同時に、雨の一雫一雫が地の中に吸い込まれ、生

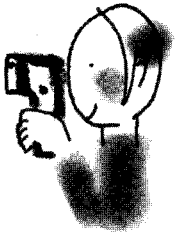
ある物へのかけがえのない命の水となるように、A君の心の中にも、園生活のさまざまな出来事が糧となり、宝物のように蓄えられていくはず……。そう願わずにはいられない一瞬でした。

「外には雨が降りつづけている。部屋の内は笑い声で晴れわたっている。窓硝子はぬれて曇っている、子どもたちの顔はみんな明るく輝いている。(中略)天の太陽は雲につつまれる日があっても、ここの小さい太陽たちは、いつだって好天気だ」

(倉橋惣三／著『倉橋惣三文庫3 育ての心 (上)』フレーベル館 二〇〇八年)

雨音が子どもたちの声と重なり、ふと、敬愛する倉橋惣三氏の言葉が脳裏を過ぎるとき、子どものそばに立てる喜びに満ちあふれ、思わず六月の空を見上げる私です。

(東京都 墨田区立八広幼稚園)



保育の中の物語(6)

よく見ると

～踏みとどまって見えてきた子どもの世界～

岸井慶子

子どもたちが楽しみにしていた今年度初めてのプール遊びは、強風が吹き荒れ中止になった。朝から先生方が準備し、水がたまり始めた大型のビニールプールの周りに、登園した子どもたちが次々集まってくる。名残惜しそうに見ていた子どもたちも、しだいに室内での遊びを始めようと、それぞれ保育室に引き上げた。

寂しくなった園庭の端で、うろうろと周囲を見回しているS子を見つけた。四歳児六月末にしては不安げなその様子に、こちらの注意が止まった。「どうしたのかなあ」と思ってカメラを向けていると、じょうろを両手で持ち、ゆっくりと移動している。しずしずと歩くのは、じょうろの水をこぼさないように

するためだろうか。テラスに立っている大きな柱を何本か通り過ぎ、今度は向きを変えてゆっくり戻ってくる。

ここまで見て、やっと「ああ、場所がわからないのだ」と気づく。どうやら水やりをしようとするプランターが見つけられず、迷っていたらしい。「二年保育なのかな。それにしても、入園して三か月近くになろうとするこの時期、まだ場所の把握ができない子がいるのだなあ」と、今度は興味をもって、意識的にカメラを向けた。

S子は、柱の脇に置かれたプランターを見つけると、ほっとした表情で歩みを早め、水やりをする。じょうろの水をすべて空けると、園舎の端にある小庭に駆け出した。そこにはもう一人の女児が、大きなたらいからじょうろに水をくんでいた。S子も並んでしゃがみ、黙って水をくむと、再び両手で大切そうに持って歩き始めた。「また水やりだ。栽培物に対する興味・関心がある子なのだろう」と思いながら、ここでカメラのスイッチを切り、保育室内の遊びの様子を観察しようと考えた。

ところが、今度も、S子は同じように迷い始めた。同じ場所でうろうろと周囲を見回している。「一回ではまだ場所を覚えられないのだ。そんなものなのだろうか。子どもは案外こんなことでも、神経を使いながら毎日生活している

のかもしれない」と思いながら、S子の様子を見続けた。

同じように、迷い、水やりをしたS子は、たらいのところへ大急ぎで走って戻る。そして水をくむと、再びじょうろを両手で持ち歩き始めた。「いくらなんでも、三回目なら迷わないだろう。今度はすんなり目的のプランターを見つけられるだろう」と思いながら見ていた。

しかし、こちらの予想は裏切られた。S子はまたまた迷い、やっと目的のプランターを見つけ、じょうろの水をすべて空けた。

「いったい何回迷ったら、場所が覚えられるのだろう。その上、あんなに小さなプランターに、見ているだけでも三杯の水を空けている。プランターの中はびしょびしょに違いない。まだ植物の側になって水の量を考えるのは難しいのだな」。栽培物への興味・関心もその程度のものなのだ、と理解した。

さて四回目。今度は迷うことなく目的のプランターに行き、じょうろの水を最後の一滴まで空けた。

そこでまた私は驚いた。S子の水やりは「同じプランター」の「同じ部分」に対して行われている。一つのプランター全体に水やりをしているわけではない。そういえば、その前もその前も、プランターの手前側に水をやっていた。その驚きを担任に確認すると、少し前にクラスでいくつかのプランターにヒマ

ワリの種をまいたのだが、S子は「そのプランター」の「その辺り」にまいたという。自分がまいた種に対するS子の思いの深さに触れた気がした。「栽培物への興味・関心」という一般的なものではなく、もっと個別な感情だった。

この日の朝、今年初めてのプールを目の前にして、子どもたちはいろいろな姿を見せてくれた。男児の数人は、プールに水をためているホースを見ているだけでは我慢できず、取り合いを始めケンカとなった。ある子は、わざと水を掛けられたと思い、相手をプールの中に洋服のまま押し倒し、先生に厳しく注意された。子ども同士のちょっとした誤解が、どのようにケンカに発展し、それを周囲の幼児が（当人同士は了解し、笑って済ませられそうなことでも）どのように教師に訴え問題にしていくか、という点で非常に興味深くドラマチックな出来事であった。

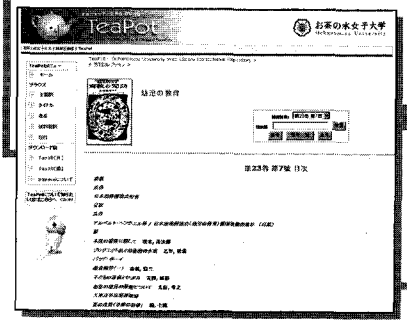
一方、ここで取り上げた水やりのエピソードは、地味ではあるが、忘れられないものだ。どんなに何気ない子どもの動きにも、必ず子どもの世界が表現され、気づかないのはこちらの側の見方によるものだ、ということを教えられたからだ。保育の中の物語は、辛抱強く踏みとどまり、見続けなければ見えてこない。そして子どもの物語は観察者の予想や期待、疑問や驚きなどに応えるようにして、その姿を現すのではないだろうか。

（鎌倉女子大学短期大学部）

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて（6）

実習指導今昔

恒川　直樹



お茶の水女子大学附属図書館の WEB サイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。
URL：http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/

保育者養成校に勤めて三年余り、実習指導にも直接間接に携わってきました。そこで今回、ネットで手軽に閲覧可能になった『幼児の教育』誌を検索するにあたって、最初に試してみたキーワードは「実習」でした。ちなみに執筆時点では、公開されている号の刊行年次の関係からか「実習」ではヒットせず、旧字体の「實習」で四十二件の該当がありました（二〇〇八年十二月末現在。本稿では記事タイトルなどを除いて、原文を新字新仮名遣いに改めて引用します）。

四十二件の約半数は、その年度の「保育實習科卒業生」の名簿や集合写真、あるいは生徒募集の記事などですが、昭和初期の実習指導の特集や実習生による文章なども含まれ、当時の実習の息づかいが伝わってきます。

本稿では、現代の実習にまつわる私感も交えながら検索した記事から、興味深く読んだものをいくつか紹介したいと思います。

実習生による記事から

まずは、当時の実習生自身が書いた文章を二つ取り上げてみます。

「観察話二つ　一ぼうふら」保育實習科
幼兒の教育第三十七巻第六号
一九三七年六月発行　四十七～四十八頁

「この二つの観察話二つは保育実習科生の作であります。御批評下さいませ（編集部）」という紹介と共に、虫を幼児に示しながら、その形態や一生について解説する話が載せられています。一部を引くと、ぼうふらが蚊になるという説明の後にこう続きます。

だからね、ここにいるぼうふらさん達はお父様やお母様と一緒にいるのでは無いわけです。皆子供ばかりなの。若しかするとぼうふらさんの幼稚園かも知れ無いわね。一寸ぼうふらさんに聞いて見ましょうか。「もしもしぼうふらさんぼうふらさん、そこはぼうふらさん達の幼稚園ですか」・・・そうですよ、って云っています。皆楽しそうに泳いで遊んでいます。お兄様のぼうふらさんは明日位になるともう大人になってしまうの、早いでしょう。そしてあのチクンとさす蚊になってぶんぶんこの瓶の中を飛び回っていますよ。（四十八頁）

保育者の一人語りの形式で書かれた、逐語的保育案のようなもので、保育の場で実践に供されたかどうかわかりませんが、「めだかの学校」ならぬ「ぼうふらの幼稚園」という発想には意表を突かれました。夏場、誰もが悩まされる蚊ですが、ぼうふらまでも気に留めることはまずありませんし、あっても、せいぜい駆除の対象としてでしょう。擬人化といえばそれまでですが、こんな視点からのんびり、じっくりとぼうふらを見つめるのは、今も変わらず幼児と保育者が生き

ている時間の流れなのではないでしょうか。

「實習日記から（讀者より）」　北原時枝
幼兒の教育第三十四巻第二号
一九三四年二月発行　六十四～六十六頁

東京のある幼稚園で、長期にわたり実習を行っている実習生の日記です。一学期の実習を経て、二学期の日記の中から抜粋されています。日々の子どもたちの様子や遠足のことなど、保育全体の面白さや喜びに混じって、一人ひとりの子どもへのまなざしや思いをつづった文章もあり、読み応えがあります。

十月六日　Kさんは、近頃だんだん素直になって、私のそばに寄って来る様になった。そして何かして遊びたい様に見える。此の時ぞと私は一層朗かに遊んで上げた。なるべくKさんの心に合う様にと努めた。すると他の子等が寄って来て邪魔をする。こんな時は本当に困ってしまう。Kさんはまだ一般の子等と遊ぶだけ馴れていない。自然に皆んなの中に入り遊べる様にして上げ様と思うのに、他の子に言い聞かせてもわからない。今日は本当に困ってしまった。どうしたらよいのかしら。（六十五頁）

Kさんはこの実習生にとって気になる子だったようで、その時どきで周囲に対して好悪両極端の態度をあらわにするKさんの姿、そして、自分自身が抱くKさんへの「腹立て」「悪しみの心」なども、率直に見つめた記述が、十二月の日記にも記されています。

このような経験は、現代の実習生もぶつかる壁の一つであり、学生たちはしばしば、しかしおずおずと口にします。「おずおずと」というのは、特定の子どもに肩入れしたり、愛すべき子どもに対して腹立ちや疎ましさなど、ネガティブな感情をもってしまったりすることは、なかなか受け止め難い事態なのでしょう、筆者が講義中に、自分の同種の経験や対人関係の理論

を話して初めて、ためらいがちにうなずきながら打ち明ける学生も少なくないからです。

子どもが好きという保育者の基本感情は今も昔も、また実習生も現役保育者も変わりません。けれども、その気持ちの粘り強さは、子どもたちとの日々の出会いの中で、肯定的な感情のみならず、自分自身の負の情動とも直面しながら、それらをおり込んで練り上げられていくものなのでしょう。この実習生は**「保姆というものは楽しいものだが、むずかしいものだと、しみじみ思った」**とも記しています。この言葉が腹の底から出るようになることが、ある意味では実習生としてのゴールであり、そして実践者としてのスタートなのかもしれません。次に、その実習生を育てる側の言葉にも耳を傾けてみます。

実習指導に関する記事から

一九四四年に本誌が休刊する直前の一年程は、戦争激化の下、保育現場も激動した時代でしたが、実習の課程も大きく変化しました。本誌には特集号も含め、実習関連の記事が多数掲載されています。

それらを総覧すると、かねてからの保育界の要望に「戦時保育」という時局の要請が加わって、より重視された保育実習の指導に関して、各地の保育現場が非常に苦心して対応する様子がわかります。師範教育令の改正に伴い、実習指導が新たに職務として規定された師範学校附属幼稚園からは、大量の実習生を受け入れる苦労や工夫がつづられ、また高等女学校は戦時託児所を附設して実習を行うなど、制度改革のただ中にある現場の声が生々しく感じられます。

「保育實習の指導」
幼兒の教育第四十四巻第七号
一九四四年七月発行　一～三頁

この特集は、高等女学校での保育実習必修化を念頭

に置いて、冒頭に倉橋惣三が「保育實習指導概要」として筆を執り、その他の著者によって各保育項目についての具体的な指導論が述べられています。

保育指導の大もとの第二は、幼児の保育法の要諦を把握させることであるが、これも普遍的な保育理論から導いたり、余り細い保育技術を初めから授けたりするよりは、生徒自身が教養ある青年女性として持っている幼児への情愛と常識とを、素直に、殊にみずみずしく発揮させることから出発したい。理論や方法の普遍規格のみを気にして、どうすべきか、どうしなければならぬのかといった風な思案ばかりさせて、折角くの情愛と常識とを抑えさせたり閉ざさせたりしてはならない。殊に、そんな形式的指導に過ぎて、情愛のあたたかさもなく、常識のなまなましさもない、「冷いから誤らない」といった癖をつけては大変悪いことである。（一頁）

倉橋のこの姿勢は、現在でも実習指導の根底に基本的に共有されているように思います。一方で、こうした「情愛のあたたかさ」や「常識のなまなましさ」といった語は、一見すると、倉橋自らが対置しているように「理論や方法の普遍規格」と相いれない印象を与えるのも事実です。実際、実習生への期待を込めた評価として実習園から時折うかがうのも、「子どもとよく遊べるが、技術が伴えば……」、「知識はあるがまだ子どもになじめない」という両側面のバランスの問題です。ここで、倉橋は出発点としては「情愛」を重視しています。ただ次の文章を読むと、いずれに重心を置くかという問題設定を超えて、保育の両輪であるこの両側面をつなぐ軸となるのが、保育者としての専門性なのではないかと考えさせられます。

朝次々に迎える幼児を一目見て、その健康の状態に気がつかなくてはならない。全体の健康は勿論、目や鼻や耳の部分々々まで、精確な診断はあとで丁

寧にしたり、専門家を俟つとして、兎に角く異常がないかということには、直感的に気がつくように慣らされなければならない。（中略）こういうことは、慣れることによってよく出来るが、その根本となるものは、親切の有無深浅に基く。しんみのじつがなくては、保育は出来ない。指導して、日に日に子どもへのじつの出来るようにしたい。しんみに世話の出来るようにしたい。（二頁）

ここでいう「しんみのじつ」は先の「情愛」と似ていますが、それ以上の意味を含んでいると私は考えます。「情愛」が実習生の人として自然に育んできた「子ども一般が好き」という基本感情だとすると、「しんみのじつ」は、その情愛が、先述の実習生にとってのKちゃんのように、固有名をもった「この子（たち）」と出会いかかわることを通じて練り上げられた、保育者としての粘り強い情愛なのではないでしょうか。そうした深い配慮性があって初めて「いつもの○○ちゃんと何か違う」と、一目見て直感的に気づくことができるものでしょう。実習の意義深さは、養成校で学んだ理論や方法を子ども一般の姿で確認・練習するだけでなく、ほかならぬ眼前のこの子に対して親身になってかかわり、喜びと共に困難をも味わうことを通じて、知識や技術の重みを感じることにあると思います。

保育者の免許資格制度が改革のさなかにある今日、私たちは実習の在り方という、この古くて新しい問題を、どう問い直すべきなのでしょうか。指導に携わるわが身を振り返ると、ひとりの人間としての実習生＝学生に対して、粘り強い「しんみのじつ」を発揮できているかというと、実に心許ない限りです。「育てる」という意味では、指導教員の課題も、実習生の課題と案外近いところにありそうです。

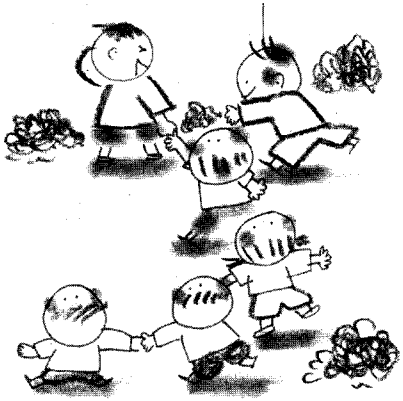
（常磐会短期大学）

子ども文化の詩学（3）

遊びの暗がり

―伝承遊びに潜む力―

森下みさ子



◆今もなお伝承される遊び

「だるまさんがころんだ……」。マンション敷地内のキッズ広場から今日も元気な声が響く。遊び方を見ていると、私が子どもだった数十年前とほとんど変わらない。「『だるまさんがころんだ』するもの、よっといで」と指を高く掲げた女の子の周りに、顔見知りであろうマンションに住む子どもたちが駆け寄る。お姉ちゃんやお兄ちゃんにくっついてきた小さな子から、小学校低学年ぐらいの子まで、わらわらと集まる様子はひと昔前の原っぱのようだ。掲げた指にちゃんと届く子まで

が正式メンバーで、届かない小さい子たちが「みそっかす」（「おみそ」とか「おまめ」という言い方もある）なのも昔通りである。小さい子はジャンケンの輪に加わってはいても、タイミングよく拳を出せないまま、大きい子たちの中から鬼が決まる。その後も大きい子にはやや厳しく、小さい子にはやや甘く、鬼が振り向くたびに動いたか動いていないかの判断が下されて、やがて鬼の手には鎖のように子どもたちがつながれていく。そして、じりじりと鬼に近づいていた子の「切った」のかけ声と同時に鬼につながれていた鎖が切られると、それこそクモの子を散らすように、パラパラと駆けて鬼から離れる。と、鬼の「止まれ！」の声。

そこから先、私の子ども時代とは少し違う遊び方を知った。「何歩？」と聞く鬼に対して、子どもたちは大きな声で「カミナリで五歩！」と答えたのだ。「カミナリ？」と首をかしげながら見ていると、鬼はジグザグと稲光のような軌跡を描いて、逃げた子たちの方に近づいていった。なるほど、原っぱのようには広くないキッズ広場ならではの工夫なのだろう。歩数を減らすのではなく、鬼がカミナリになって稲光のようにジグザグと進むことで、結果的に逃げた子たちとの距離を調整していたのである。

それにしても、いわゆる伝承遊びが、マンションのキッズ広場という極めて現代的な場所で、昔ながらに遊ばれていることに驚かされる。「この指とまれ」に続く「指切った」が、その昔遊女と真男の間で交わされた指切りの約束に根をもつことなど、子どもたちは知る由もないだろう。にもかかわらず、「指切った」仲間同士は同じ遊びのルールにのっとって遊ぶという合意の仕方は、歯切れの良いリズムと共に今日まで伝わっている。

そもそも「だるまさんがころんだ」という意味不明の縁起でもないような数え言葉が、何をもって小さな身体を介して、延々と伝えられてきたのだろう。しかも、そこに「カミナリの五歩」という工夫が加えられ、伝承遊びは見事にマンションの狭いキッズ広場に息を吹き返している。子どもの身体という、まだこの世に現れて間もない、小さくてよく弾む容器をもって、はるか昔の身体の記憶と新しい工夫が盛り込まれているのである。幼い者たちが、好んで選び取って伝えてきた遊びには、いったい何が潜んでいるのだろうか。

◆伝承遊びの深みへ

幼いころ誰もが遊んだであろう「かくれんぼ」を取り上げて、藤田省三氏はそこに、精神が形づくられるときの「経験の胎盤」が用意されているという。藤田氏によれば、かくれんぼの鬼が目を開けたときに感じるのは、「人っ子一人いない空白の拡がりの中に突然一人ぼっちの自分が放り出されたよう」[1]な感覚であり、それは実は、社会から外されたときに感じる「孤独」の体験に等しい。大げさに聞こえるかもしれないが、その非社会的な呼び名からして「鬼」が引き受けるべき「孤独」であることは間違いないだろう。しかし、藤田氏はその一方で、隠れている側に訪れる「孤独」の体験にも目を向ける。思い出してみると確かに、見つからないように身を潜めて隠れているときもまた一人ぼっちであった。そして、その「孤独」に耐えられなくなるころ、心ひそかに鬼が見つけてくれることを願った。ということはすなわち、鬼も隠れる側も共に一時的に「社会からの隔離」に遭ったような孤独を体験し、互いに見つけたり見つけられたりすることで「社会に復帰」するという救いを得ているのだ。かくれんぼ

では、そのように鬼も隠れる側も「社会喪失の危機」を体験し、共に自分を救いながら相手をも救う「相互性の世界」を体験しているといえる。

しかも、この鬼と隠れる側とは、入れ替わることによって両方の立場を体験する、その繰り返しこそが遊びを活気づけているのだ。社会からの隔離・社会喪失・社会復帰というサイクルを、異なる立場から相互に体験する。藤田氏はそれを「対抗しながら相互に救出しあう統合」という人間社会の課題に差し向けながら、それが子どもの遊びを通して、軽やかに体験されていることを指摘している。人が人間社会で生きていくうえで担うべき精神的な課題、実現には困難を伴う複雑な課題が、かくれんぼにおいては「経験の小さな模型」のように、軽々と楽しく体験されているのだ。あくまでも遊びとして……。だからといって、かくれんぼの遊びを残さなくてはいけない、と声高に主張したいわけではない。残すとか教えるとかといった大人の教育的価値観を超えて、子どもたちがおのずと繰り返し遊び続けてきた遊びの中に、人間社会の根幹を支える精神の深みが在ることにまずは目を開くべきなのだろう。

◆遊びの暗がりが意味するところ

かくれんぼの省察と同様のことは、子どもの遊ぶ身体を介して延々と伝わってきた伝承遊びの、どれにも当てはまることに違いない。本田和子氏は「花一匁（はないちもんめ）」の遊びを追想して「この遊びは、『選ばれる』ということの晴れがましさと恐ろしさを、何よりもよく体験させてくれた[2]」という。そして、その体験の奥には、実際にあったであろう「子の売買」（子買い）や、市が立つときに合わせて行われる「男女の交渉」（歌垣）が潜んでいると透視している。「鬼がいるから行かれな

い」という歌詞の「鬼」は人買いかもしれず、「お釜底抜け」「お布団ぼろぼろ」と歌われる貧しさは、子を売るしかない状況を暗示しているかもしれない。その後に続く「あの子がほしい」「この子がほしい」というやりとりは人身売買か男女の関係か、いずれにしても、決して能天気ではいられない、緊張を強いる状況である。にもかかわらず、子どもたちは手をつなぎ合い、相手に向かって足を思い切りけり上げて、高らかに交渉を繰り返す。あえて歴史の暗がりから引き出してきた歌詞を用いて、子どもたちは「選び選ばれる」人の関係を、緊張感を乗り超える形で遊んできたのである。大人たちの意図を超えたところで形づくられ、遊ぶ身体を介して延々と命脈を保ってきたこの遊びにも、やはり「体験の小さな模型」を見ることができるだろう。

しかし今、「花一匁」は一部の小学校で禁止され始めているらしい。なぜなら、「あの子だけは選ばない」という仲間外れのいじめがあるからだという。確かにたびたび「ほしい」と名指されて、声援を受けながらジャンケンの責を果たす人気者に比して、一度も名前が呼ばれないとなれば、無視されているようなつらさを味わうかもしれない。それが、故意になされ続けるのであればいじめとも受け取れるだろう。しかし、だからといって、延々と遊ばれ続けてきた伝承遊びが内包する深い体験の知恵を、手放してよいものだろうか。

先に触れたように「鬼」という言葉そのものが人間社会からの隔離を暗示するかのように、ほかの子どもとは異なる役割を一人引き受けることを意味する。もし、この役割を誰も引き受けなかったら「鬼」が登場する遊び自体、成り立たないだろう。また、「鬼」という言葉を無害なものに言い換えてしまったら、疎外感や孤独感と同時に、

遊びの緊張感も減ってしまう。何よりも、「鬼」が住まうこの世ならぬ異界との境界に開かれた遊びの空間の、深いけれどカランと乾いた闇は、あっさりとかき消えてしまうだろう。そうなったとき、人間の意図を超えて伝わってきた、遊びの中に深く刻まれた知恵は失われてしまうに違いない。

教育的価値観による積極的な指導や大人の介入がないまま、それでもなお、子どもたちの身体を通して、特有のリズムと謎めいた言葉を用いて、これらの遊びが遊ばれ続けてきたことの意味は大きい。そしてそれが、就学前の幼児期を中心に、学校の教育からは離れた場で遊ばれてきたことを考えるなら、これらの遊びが内包する体験の知恵は、教育という場よりも課外、あるいは保育という場にこそなじむものなのではないかと思う。同じ年齢の子だけに限るわけではない、同じ能力の子だけが集まるわけでもない、大人の指導が加わることもなく、能力や体力を問うことも、決定的な勝敗も求めない。その一方で、孤独や阻害と救い、悔しさや厳しさと笑い、特有の緊張感を維持しながら、それらが軽々と「遊ばれる」とき、合目的的な意図を超えた、体験的な知が育まれているに違いない。そしてそれは、伝承遊びが抱えるリズムやコトバややりとりの中に潜む暗がりを、子どもたちの身体感覚こそが伝えてきた成果なのではないだろうか。その感覚の前に私たちはもっと謙虚であるべきかもしれない。

（白百合女子大学　文学部　児童文化学科）

引用文献

1　藤田省三／著　『精神史的考察』平凡社選書
一九八二年、内「或る喪失の経験―隠れん坊の精神史」
2　本田和子／著『子どもの領野から』人文書院
一九八三年、内「花一匁―子買いと歌垣」

保育の現場から

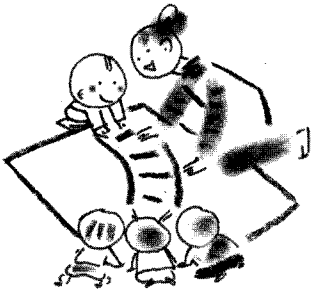
A男との二年間

春野すみれ

私の勤めている幼稚園はさいたま市にある年少、年中、年長各二クラスずつの小規模の園です。子ども一人ひとりの個性を大切にして伸びていけるように、保育者全員で協力し合って保育をしています。子どもたちは、幼稚園で出会うたくさんの友達と遊びかかわる中で、笑ったり、泣いたり、時には葛藤しながら、相手を思いやる気持ちを育てていきます。子どもたちから自然にわいてくる優しさに触れたとき、とても温かい気持ちになります。

年中、年長と続けてA男の担任をする中で、子どもたちはお互いに育ち合っていくということを学ぶことができました。

今回、その二年間を書いてみたいと思います



A男について

A男は、入園前に広汎性発達障害との診断を受けました。言葉は達者ですが、自分のペースでの行動が目立ち、何も言わずに遊びに入っていったり、周りの子

にだめと言われると「お前なんか、お前なんか」と怒って、泣いて止まらなくなったりということが毎日のようにありました。

アスペルガー症候群という障害の特性として言われることですが、視覚から入る部分が大きく、興味をもつとすぐに手を出してしまったり、相手の気持ちの読み取りが難しかったりすることが関係しているようでした。被害者意識も強く、トラブルのたびに、相手にされたことや言われたことに、とても傷ついていて、家でも「あの悪い子は太鼓にしてたたいちゃえ！」などと、A男独特の考え方や話し方で母親に伝えていたようです。

年中「A男くんってよくわかってるんだね」

入園当初、A男はトラブルの連続でした。特に、魅力的なB男のブロック遊びに興味をもち、手を出すことが多く、B男は「だめ！　僕が作ったんだよ！」とよく泣いて怒っていました。その都度A男には物の借り方や遊びへの入り方、謝り方を次へつながっていくように願いを込めて話してきました。

六月。A男とI保育者（週一、二日A男の補助に入る）が紙に線路と駅名を書き込み線路作りをしていました。A男たちの様子を見ているB男、D男、A子に気づいたI保育者は「A男くん、みんなに駅を教えてあげたら？　埼京線なんだよね」と話すと、「知ってる！」と三人とも話に入ってきました。

A男は「ここが大宮で、ここが北与野で……ここが中浦和。武蔵浦和は通勤快速が停まるんだ」とうれしそうに説明すると、B男は「へー、A男くんって、よくわかってるんだね」。褒められたA男は誇らしげでした。

このB男の「よくわかってるんだね」の言い方はまるでお兄さんです。しかし、A男にとって友達の良い

所を認めることのできるB男の存在は、その後とても大切な存在になっていきました。

二学期に入り、運動会の取り組みが始まったのですが、自分の遊びに区切りがつかず、「行きたくない」と室内で本を読もうとするA男でした。先の見通しをもつことが苦手なため、声をかけるだけではなく、事前に紙に予定を書いて知らせたり、「本を見ていてもいいけど、テラスにいてね」と、外へ誘ったりしていました。練習をやっているその場にはいてほしい、その雰囲気を感じてほしい、視界に入ってくれば興味が出てくるのでは、という気持ちや考えからでした。

そんなある日のこと。学年表現（音楽に合わせて踊ったり身体を動かす種目）の練習が始まり、私はA男をテラスに連れてきました。そこで、B男たちが段ボールで作った救急車に乗って参加しているのを見て、惹かれたA男は、救急車チームに入ることにしたのです。B男が「始まるよ」と声をかけたり、周りの子たちもA男なりの参加を受け入れたりしていました。そして迎えた運動会当日は、A男なりに頑張り自信になったようでした。

またこのころ、「入れて」や「貸して」のひと言を使えるようになってきて、ほかの友達との小さなやり取りが増えていきました。「A男くん、お友達ができたね」と、保育者にこっそり伝えてくる子の姿もあり、A男の成長やそれを喜ぶ子どもたちをうれしく思いました。

年長になって

クラス替えをした進級当初、A男は特に不安がることなく、喜んで新学期のスタートを切りました。しかし、一緒のクラスになった新しい子どもたちと毎日のようにトラブルが起こりました。その都度、どうしてこうなったのかをゆっくり聞いたり、保育者が話をしたり、紙に書いて説明したりすると、原因がわかっ

て、友達に謝ったり、もう一度伝えてみる姿がありました。

六月、段ボールの電車を作り始めたA男を見て、E男が「手伝うよ！」と入ってきました。「いいよ」と受け入れられるようになったA男。その後、新しい友達とのかかわりが多くなっていきました。

こんな出来事もありました。年中の三学期には、いす取りゲームに興味をもてずに参加しなかったA男でしたが、六月半ばのこの日、初めて一緒に楽しむことができました。しかし、A男は最後まで勝ち残ったB子に「おめでとう！」と抱きつき、驚いたB子は泣いてしまったのです。

「相手はどう感じるのか」と考える前に行動してしまったことは、A男の苦手な部分が出たなと思いました。しかし、B子に対する気持ち、そして一緒に喜ぼうとしたA男に、大きな成長を感じ、うれしくなりました。

七月「イルカショー」

この日、B男とC男が大型積み木でイルカのジャンプ台や、くぐる所を作り始め、「イルカショー」をしようということになりました。C男はとても正義感が強く意欲的な子です。一方、落ち込むと立ち直りに時間がかかる子でもあります。そんなC男とB男が二人で遊ぶのは珍しかったので、楽しめたらいいなと思って見ていました。

部屋に戻ってきたA男が、B男とC男のイルカのお面を見て「あっ、イルカだ。僕もやりたいな」と言いだしました。「えーっ」とC男。表情も曇ってしまいました。C男は背の順で並ぶ時に、自分の前でなかなか立っていられないA男を何とかしようと、いつも頑張っていました。そんな〝ちょっと大変〟なA男が遊びに入ってこようとしているのです。

しかし、B男が「いいよ、でもちゃんと僕について

きてよ」と言ったことで、渋々だとは思うのですがC男もうなずいて遊びが始まりました。三人でイルカになりきり、ジャンプやくぐることを楽しみ盛り上がりました。

二学期、うまくいかないことがあり、パニック状態になっているA男に、B男が「A男くん大丈夫だよ」「イルカショーでもやる?」となぐさめながら誘うことで、再びイルカショーが始まりました。A男にとってB男の存在が大きくなり、B男を軸にしてA男とC男がつながることができたことはとてもうれしく、大切にしたい関係だと思いました。

A男とC男がペアになる

運動会の年長のメインである組み立て体操。二人組みのペアを背の順で決めました。A男の相手をB男にしようか悩んだのですが、一学期にA男を並ばせようと頑張っていたC男に任せてみたい気持ちもあり、A男C男のペアで、運動会の取り組みは始まりました。

正義感もあり一生懸命なC男。A男に何度も「A男くん、A男くん」と声をかけ、手を取ろうとします。しかし、気分がなかなか乗らないA男は練習に参加しようとしません。C男には「先生たちも一緒にやるから、無理しないでね」と伝えていたのですが、つらくなってしまったC男は突然泣き出してしまいました。すれ違いの二人でしたが数日後、一緒に遊ぶ場面があり、自然な関係に戻ることができました。「運動会の予行は、やらない!」と言っていたA男。気づくとC男と楽しそうに踊っていました。

年長の運動会となると、本番だけではなく創りあげていくその過程も大切で、その達成感も味わってほしいというのが願いです。しかし、A男にとってはゴールできれば百点であり、その過程は無意味なようでした。そのため練習には気持ちは入らず、途中で抜け出し本を読もうとします。どうかかわるのがA男のため

なのか……私はよく葛藤していました。

私の葛藤を知ってか知らずか、クラスの子どもたちは、そんなA男の姿を、しっかり受け入れていました。ピラミッドを作るとなれば、A男を誘いに行き、全員で波を作るとなれば、また誘いに行く。その中でも、D子が「A男くんがいないとだめなんだよ」と優しく声をかける場面があり、その様子を見守りつつ、A男には「自分が必要なんだ」ということに気づいていってほしいと願っていました。

運動会当日、A男はC男やみんなと一緒にしっかり取り組むことができました。A男もC男も、二人なりに達成感を感じることができたと思っています。

A男と過ごした二年間は、担任としてたくさん悩んだり、たびたび葛藤したりしてきました。しかし、A男とかかわってこられたことで、私もクラスの子どもたちも得ることが多くありました。

特にB男とC男。A男が成長できたのはB男の存在が大切だったと思います。しかしそれだけではなく、実は、B男もA男に助けられていました。遊びに入れない時期があったB男は、A男とのかかわりによって支えられ、また次に向かっていくことができたのです。C男もA男との出会い、かかわりによって幅が広がっていったと考えています。

子どもたちは互いの存在を認め合いながら友達とかかわり、できないことがあれば、自然に助け合えるようなクラスの雰囲気になっていきました。A男もB男もC男もほかの子どもたちも、みんながいたことで、互いに育ち合っていったのではないでしょうか。これからも子ども一人ひとりを大切に考え、そのメッセージを伝えながら、愛情をもって接し、私自身も子どもと共に成長していきたいと思います。

（埼玉県　私立幼稚園）

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(30)〉

「総合的保育者」養成を支える「人」と「場」

浜口順子

プロジェクトの目指してきたもの

お茶の水女子大学における「幼・保・大連携プロジェクト」（二〇〇六年度から進行中）で取り組んでいる多様な活動や研究について、二〇〇七年の一月号から二年半にわたり、毎号この場をお借りして報告してきました。その内容は整理すると、だいたい下のようになります（かっこ内の数字は掲載回数で、同じ著者による連載は一として算定しました）。

・海外の保育視察報告（五）
・保育現場からの報告　（四）
・国内の保育視察報告　（三）
・ナーサリーと大学の共同研究（三）
・二歳児の発達研究　（二）
・授業実践の報告・考察　（二）
・外部講師による授業の評価・考察　（二）、
・カリキュラム改革（一）
・外国の保育動向　（一）

掲載回数からすると、海外・国内の視察に特に力を入れているように思われるかもしれませんが、そういうわけではありません。むしろ主眼は、授業・カリキュラム研究にあり、私たち保育・児童学系教員が教職課程（幼小、中高の家庭科）の先生方や保育現場（附属二園、養護学校、学童クラブ、公立幼稚園など）の保育者との連携を図りつつ、授業（講義・演習・実習）の内容や成果を確認しあい、いろいろな授業方法を試みてきています。

このプロジェクトは「総合的保育者」、つまり職業的な保育者だけでなく、世の中の「子育て支援」を家庭もしくは社会の両面から支える担い手を育成することを目指しています。そのためには、「人を育てること」「子どもという存在」にセンシティブな感性と知性を育てる必要があると考えています。

こうした目標を実現しようとするうちに、前に示したような多様な活動・研究種目が、必然的に求められるようになり、当初の計画を増幅させながら現在に至っています。今回の報告は、このプロジェクトの構造とダイナミクスを生み出している「人」と「場」に焦点を当てて考えてみようと思います。

「人」がつくる授業

「幼・保・大連携プロジェクト」を主に担う大学のスタッフは、保育・幼児教育系の教員五名（人間生活学科、チャイルド・ケア・アンド・エデュケーション講座）と、教育研究特設センターに配属されたプロジェクト専任講師三名です。このプロジェクトは、国立大学法人化に伴い導入された、特別教育研究経費補助を受けていますが、同じ経費補助を受けているほかのプロジェクトに比べて「人」への比重がかなり大きいのが特徴です。高額の実験施設を購入するのでもなく、研究拠点開発系プロジェクトのような大掛かりなイベントを開催する必要性も低いものですから、予算規模

が相対的に小さい中で、「人」をいろいろな形で必要とする割合が大きいのです。

日本では昨今、効率化、合理化などの経営戦略を、教育・福祉の分野にまで適用する傾向が顕著ですが、大学経営もその流れに抗しきれない事態になっています。しかし、この連携プロジェクトは、その中にあって「教育には人手が欠かせない」ということを歴然と示す結果になっています。

なぜ多くの人を必要とするのでしょうか。第一に、幼児教育学、発達心理学、人間行動学、教育社会学などの「枠組み的専門領域」と、保育学、保育史、保育文化論、乳児保育論、保育観察法、保育実践論等の「内包的な領域」をゆるやかに分担しあう人たちが必要だということ。

また、講義や演習を企画・実施する上で、「一（教員）対多（学生）」という形式をとらない授業を企画していることがあります。複数の教員が同時にかかわり、場所も室内だけなくキャンパス内の空き地や外部の施設に出て、体験的共同的学びを目指そうとすると「人」が必要になります。ただ人数が必要という意味ではありません。訪問先との打ち合わせや話し合い、学生との連絡、授業後の対話的なフィードバックなどを潤滑に進め、教員相互の学生理解や授業評価をつき合わせて話し合うには、配慮ある「人」の働き合いが不可欠なのです。その結果、教員同士で授業の省察をし、次のステップへの検討をするプロセスで、「学びの履歴」としてのカリキュラムが生成されていくのです。

実習関連の授業（一年次の養護学校、障がい児の学童クラブでの実習、二年次後期の二附属園と公立幼稚園・保育所、私立幼稚園における観察、三年次のインターンシップ、四年次の教育実習）でも、実習先の選定・交渉、打ち合わせ、教員の付き添い、事後のフィードバックや個別的な課題への対応など、さまざまな場面への対応で「人」がとても重要です。

大学らしくない教育？

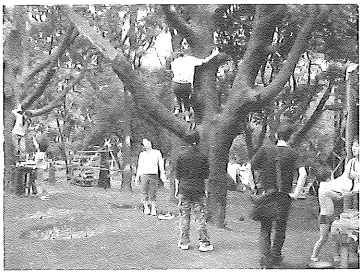
授業をいわゆる参加型対話型にすることは、近代の大学教育がよしとしてきた、教壇からの一方的で権威主義的な教授法への一つの批判的な在り方であることは確かです。しかし、このプロジェクトがそれを最初から意図したわけではありません。私たちが目指していたのはむしろ、保育における大人と子どもの関係性を、大学教育の中に包含させることでした。受容されている感覚をもちながら、自らの興味・関心を見出しつつ育ち育てられる……という保育的関係における「育ち」の特質を、今の学生たちに自ら体験してほしいという願いがまずありました。

授業の特質は次のようなものになります。

【形式】複数の教員と、マイクを使用しなくても対話しあえる程度の人数の学生が出会い、対話的に、また「座学」にとどまらない、身体性に訴える経験の機会を用意します（写真1、2）。

【方法】テーマとなる問題を扱う際、その内容自体とそれが問題となるのはなぜか、というメタ的な視点とを、同時に考えていけるような授業構成を意識しています。一定の知識を示す場合もありますが、その知識が含む日常的観念や、常識的な判断基準への問いを発すること、またそれに基づいて自己省察することが重要だと考えます。

▲写真1：たき火でパンを焼く



▲写真2：木登り

【構造】各授業は半年か通年続きますが、その内容構成は「基礎から応用へ」のボトムアップ式ではなく、授業の目的の周辺をらせん状に行きつ戻りつするつながり（シークエンス）を形成します。各授業の結論は教員が提示するのではなく、学生一人一人が見出すことができるようにオープンにしておきます。教員は、学生の発言や感想記録などによって、各学生の思いや学びをできるだけくみ取り、ほかの学生にも共有してもらいながら、また別のテーマにリンクさせていけるような授業の組み立てを図ります。

このような授業ですから学期末の形式的評価が難しい面もありますが、授業を起点とした教員と学生の相互的省察の一プロセスととらえ、学生の次のステップへの足がかりとなるよう配慮しています。

保育・幼児教育の授業を受講する学生の中には、発達にかかわる臨床相談員を目指す人が多くいます。保育においても臨床の場においても「受容される経験」はその根幹となるものですが、お茶大生の中に、高校までの学校生活の中で（あるいは家庭においても）、この経験が不十分なのではないかという印象をもつ学生が少なくありません。「受容」や「ラポール（臨床の前提となる信頼と安心のある関係）」の意義を、頭だけで考えて、乳幼児期や相談者（クライアント）にだけ特別に必要なものと勘違いしているのではないかという危惧を抱きます。ですからいっそう、大学の授業においても高等教育機関なりの「保育的関係」を実現することは可能であることを示し、受容されながら育つという実感を、学生がその年齢なりに身をもって体験してもらいたいと考えています。

「場」が人を育てる

教員の個人研究室が居並ぶ中にある「保育資料室」は、私たちプロジェクト担当者のいわば「たまり場」になっています。授業や諸活動の打ち合わせや準備、

講師それぞれの担当する自主ゼミをしたり、院生がゼミの予習をしていたりもするので、「誰か」がいることが多いのです。「誰か」いるだろうからアポイントなしでいつでも立ち寄ってくれてOK、と言える場所で、授業の後などに話し足りない学生には「ちょっと来て一緒に話そう」と誘うのもここです。

私たちは定期的な会合として、半フォーマルな月例会のほかに、週一度の昼休み、附属園の先生や非常勤の先生にも、時間が許せば立ち寄って雑談をしていっていただけるような「サロン」をもっています。

この「雑談」という行為には意外な効用があり、情報交換、連帯感の形成などに加えて、思いがけない発想を生むことが少なくありません。また、先に紹介したような授業をしていますと、ハプニングや予定変更を余儀なくされることが多いのですが、そのような偶然的な事象に対して、柔軟に、しかもポジティブな姿勢で対応しようというチームワークが、この雑談する「場」で自然に形成されてきたと言えそうです。

「授業の合い間」というすき間の時間に、間隙的な空間（たまり場）が生まれ、一つの教育の場が生成されつつあるように思われます。こうした、偶然性を享受して喜びに変えるような教育的在り方は、ジェンダー論的に言えば、「計画性」の対岸にある、女性的特質を表していると言えるでしょう。その意味で、ネル・ノディングズの「ケア」する人としての教師論は、女子大学という高等教育機関におけるケアリングと教育の関係を今後研究する上で、詳細に検討したいと思います。学生総数三千余名の本学での教育実践を展望するとき、ノディングズの「連鎖的な関係や同心円的な関係を形成するには、小規模な学校を考察しておく必要があろう」※という言葉に励まされる思いがします。

（お茶の水女子大学大学院）

※ネル・ノディングズ著『ケアリング』晃洋書房、一九九七年（二七八ページ）

編集後記

「未知なる存在」として子どもを見ると「好奇心がわいて」「魅力的な存在」になるという堀先生の文章から、ある小学校での公開授業の体験を思い出した。日ごろ幼稚園の観察をする機会が多いからか、小学生の姿は私の目にはまず新鮮なものに映り、つい「ほー」と無言でうなずいたり、ほほ笑んだりせずにはいられなかった。しかし、ふとほかの見学者（ほとんど他校の小学校教師）の顔に目をやると、意外なほど無表情で怖い印象さえあった。

小学生を「既知」的な存在として見るから、授業の面白さよりも、ねらいや効果などの目的性が重視されるのではないか。公開授業では、非応答的な見学者の存在が子どもをこわばらせ、その「魅力」を発揮させにくくするという悪循環も感じる。（H）

幼児の教育 第108巻 第6号

平成21年6月1日発行
編集兼発行人　浜口順子
編集部　金子めぐみ
発行所　日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所　株式会社　フレーベル館
☎03-5395-6604（編集）
振　替　00190-2-19640
印刷所　図書印刷株式会社
定　価　550円（本体524円）

©日本幼稚園協会 2009 Printed in Japan

表紙絵　ヨシエ
扉カット　ヨシエ
扉題字　津守　眞
カット　田崎トシ子
編集委員　上坂元絵里
髙橋陽子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613（営業）

次号予告

好評連載

- 園長のまなざし（7）　前原　寛
- 保育の中の物語（7）　岸井慶子
- 観察のまど・子どものにわ（4）　砂上史子

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開始まりました！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"
http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/ へアクセスしてご覧下さい。
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。ご意見ご感想などは、youjimail@yahoo.co.jp までお寄せ下さい。

好評発売中

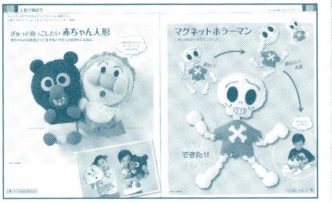
保育に活かせるアンパンマン新シリーズ誕生！

手づくりアンパンマンといっしょ

子どもたちに大人気のアンパンマンを手づくり作品で楽しむ「おもちゃ」「ギフト」「エプロンシアター」がテーマの楽しい実技書３冊。幼児教育研究家・齋藤二三子先生主宰「乳幼児の遊び研究会」からの保育や子育てへのアドバイス付きです。

わくわく☆おもちゃ

乳児も幼児も楽しめる、遊びのシーン別に 30 点の手づくりおもちゃを盛りだくさん紹介。



10901

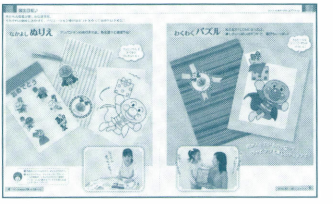
島田明美・尾田芳子・チームYamy／著

26×21cm　88ページ
定価 1,995円（税込）

かんたん ギフト

「誕生日」「入園・進級」「母の日・父の日・敬老の日」「お別れ会・卒園」など、記念日に贈るギフトを多数紹介。

10902

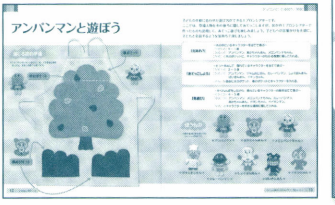


千金美穂・尾田芳子・あかま あきこ／著

26×21cm　80ページ
＋カラー型紙付き
定価 1,995円（税込）

エプロンシアター®

乳児から幼児まで楽しめる遊びや生活習慣に役立つ内容など、エプロンシアターの楽しみ方やアレンジ満載。



10903

中谷真弓／著

26×21cm　80ページ
定価 1,995円（税込）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇八巻　第六号　平成二十一年六月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

最新刊

心を育てる環境教育シリーズ

大澤 力／編著

全3巻

保育現場ですぐに役立つ実践事例と指導計画案を多数掲載。
「生活」「食育」「自然」の3つの観点から、幼児期の環境教育を提案します。

自然

③自然が育む子どもと未来

自然の美しさ、いのちの尊さを感じ取る感覚は、五感をフルに使った自然体験によって育まれていきます。子どもを取り巻く環境を見直し、自然とふれ合う保育を提案する幼児期の環境教育「自然」編。

●毎日の散歩で大活躍！　四季のアイデア満載ハンディサイズの『わくわく自然体験ブック』（52ページ）付き！

10213

26×21cm　132ページ　定価2,835円（税込）

好評発売中

生活

①心を育てるリサイクル

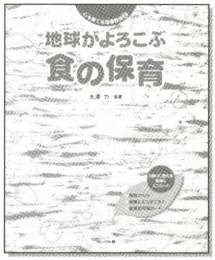
毎日の保育の中でできる楽しい活動を提案。

26×21cm
64ページ＋
環境教育絵本・型紙・CD

定価 2,415円（税込）
10211

食育

②地球がよろこぶ食の保育



食の活動を通して環境とふれ合う実践を掲載。

26×21cm
112ページ＋
3通りに使える食育&エコカード＋すごろく
定価 2,625円（税込）
10212

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五二四円）☆